

絵入本ワークショップⅢ

国際絵本シンポジウム

江戸の絵本・画譜

主催 人間文化研究機構 国文学研究資料館

実践女子大学文芸資料研究所

国際絵本シンポジウム 江戸の絵本・画譜 —絵入本ワークショップⅢ— プログラム

期間 平成 20 年 6 月 28 日 (土)・29 日 (日)

会場 国文学研究資料館

〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3

6月28日(土)

●開会の挨拶 (14:00～14:10) 実践女子大学 横井 孝

●特別講演 (14:10～16:00)

日本の絵本—普遍的な魅力、 講演：米国ブラウン大学 ロジャー・キーズ
特質と世界美術におけるその位置づけについて—

司会・通訳：東京大学 ロバート・キャンベル

Ehon: Their Unique Qualities, Universal Appeal, and Place in World Art

6月29日(日)

●研究発表 (10:30～12:15)

月岡雪鼎と絵本—西川祐信からの継承と離脱— 国際浮世絵学会 山本 ゆかり

江嶋其磧作・西川祐信画

『女中風俗玉鏡』の初版と覆刻版をめぐって 日本大学 倉貝 正江

白楽天来日の伝説とその変容

—鈴木春信の『見立白楽天』を中心に— 金城学院大学 張 小鋼

●昼食 (12:15～13:45)

●パネルディスカッション (13:45～17:00) [途中休憩あり]

絵本・画譜 そのメカニズムを読み解く

コーディネーター 国文学研究資料館 鈴木 淳

パネリスト 大和文華館 浅野 秀剛

国際浮世絵学会 岩切 友里子

実践女子大学 佐藤 悟

フランス国立東洋言語文化研究学院 クリストフ・マルケ

●閉会のあいさつ (17:00～17:10) 国文学研究資料館 伊井 春樹

ごあいさつ

国際絵本シンポジウム実行委員会代表
人間文化研究機構国文学研究資料館教授
鈴木 淳

本シンポジウムは、江戸時代の日本絵本について国際的な視野から取り上げ、その文化的な価値を明らかにしようとするものである。まず特別講演として一昨年秋、米国ニューヨーク公共図書館で、日本絵本展を企画、開催し、大きな反響を呼んだロジャー・キーズ氏を招き、日本絵本の世界的な位置づけについて講演していただく。また、氏の講演を承けて、国内外の第一線で活躍する研究者を揃え、研究発表とパネルディスカッションを実施し、その発表や討議を通じて、絵本について成立、種類、機能、利用、画題、詞書きなどの様々なファクターによる多角的な解析を行い、絵本が有する特色の実態をイメージとテキストの両面から捉え直したい。同時に、絵手本とオリジナリティ、出版取締りと絵本、海外への転出など、絵本研究が直面する先鋭的な課題についてもできるだけ取り上げ、研究の進展を図るものとする。

江戸時代を中心とした日本絵本は、世界的にもその美術的価値が高く評価されており、日本が誇るべき真の文化遺産といえる。しかし、絵本研究は、絵本、画譜が、文学と美術の専門分野の境界に位置し、両方の分野についての専門知識が要求されることから、互いに手の出しにくい分野として、一部の先達による優れた業績はあるものの、本格的な研究がはっきり遅れていたものの一つである。一方、欧米など、海外の方が、資料の目録も整備され、研究も進んでいるという皮肉な現状がある。そのため、絵本研究は、真の意味でもっとも学際性、国際性が必要とされている分野といっても過言ではなく、本シンポジウムの開催意義もまずはそこに存する。開催に当たっては、従来 of 専門意識に囚われない、学際的な新しい枠組みによることに留意した。さらに、本シンポジウムを通じて、国内外の美術と文学の研究者間の交流を実現し、日本絵本についての若手の研究主体の創出に努め、今後の展開につなげたい。

本シンポジウムは、人間文化研究機構国文学研究資料館と実践女子大学文芸資料研究所が共同主催するものである。国文学研究資料館の研究プロジェクト「日本古典籍の特定コレクションの目録化の研究」は、国際浮世絵学会の定例研究会と連携しながら、学際的な規模で絵本研究会を実施してきたが、本シンポジウムは、さらに実践女子大学文芸資料研究所が開催してきた「絵入本ワークショップ」と合流し、両者の総決算的催しとして行うものである。また、今回は、やはり国文学研究資料館と実践女子大学が協力して会期中に小展示を行うが、来る二十一年度には、本格的な絵本展示を発展的に開催する予定である。くわえて、本シンポジウムと平行して、絵本研究の論文集の編集、刊行を計作中である。今後とも、ご理解ご支援のほどをお願い申しあげる。

ごあいさつ

実践女子大学文芸資料研究所
所長 横井 孝

この度、国文学研究資料館の共催をいただき、新装・移転なったばかりの会場をお借りして国際絵本シンポジウム「江戸の絵本・画譜」および「絵入本ワークショップⅢ」を開催する運びになりました。前回の第2回絵入本ワークショップ開催の際に「このような試みを今後とも継続していきたい」と申し上げたことが、こうして特別講演・シンポジウムをまじえて実現できたことを関係各位にご報告申し上げ、深く感謝の意を捧げたいと思います。

実践女子大学文芸資料研究所は、これまでに、2004年7月29日（木）～8月1日（日）に仙台市博物館で第1回の「絵入本ワークショップ」を行い、また2006年9月17日（日）～18日（月）に東京渋谷の実践女子学園で第2回を、と隔年で開催してまいりました。それぞれ国内外の研究者を迎え、第1回には16本、第2回には13本の研究発表があり、時代・地域・領域の枠にとらわれず、ひろく「絵本」「絵入本」に関わる大きな視野のもとに活発な議論が展開されました。その後も参加希望の声が寄せられたり、次回開催の予定の問い合わせがあるなど、その反響の大きさに驚き、かつ今回の準備の励みにもなったものでした。

従来、文学研究ではどの時代の分野においても文字テキストが偏重され、分析方法の貧困さも相俟って、隣接する画像情報を等閑視する状況が続いてきました。ただ「絵本」「絵入本」は画文の両領域が密接に関連し合う領域であり、これまで絵入本ワークショップが果たしてきた先験的な試みは、文学と美術史の双方の研究に重要や役割を担ってきたのではないかと、いささか自負するところがあります。

今回は、研究発表は3本と少なめですが、ロジャー・キーズ氏の特別講演と浅野秀剛、岩切友里子、佐藤悟、クリストフ・マルケの4氏によるパネルディスカッションを盛り込んで、むしろ規模を拡大したかたちになりました。表題の絵本・画題を問題を深く掘り下げただけでなく、大きな拡がりのある熱い議論の場となることを強く期待いたします。

さて次に、第2回のワークショップの際にも申し上げたことを、ここでもう一度くり返して、開催のご挨拶といたします。——文芸資料研究所はこのような試みを今後も継続していきたいと考えております。これにつきましても忌憚のないご意見をお寄せいただけたらと念願しております。今後とも皆様のご支援をよろしくお願い致します。

第一部

国際絵本シンポジウム

「江戸の絵本・画譜」

6月28日(土)

開会の挨拶 横井 孝 [実践女子大学] (14:00 ~ 14:10)

特別講演 (14:10 ~ 16:00)

日本の絵本 普遍的な魅力、
特質と世界美術におけるその位置づけについて

Ehon: Their Unique Qualities, Universal Appeal, and Place in World Art

講演: ロジャー・キーズ [米国ブラウン大学]

司会・通訳: ロバート・キャンベル [東京大学]

Ehon: Their Unique Qualities, Universal Appeal, and Place in World Art

Brown University Roger Keyes

Ehon is a unique and uniquely appealing form of collaborative book art with animist, Buddhist, and Confucian roots, in which pictures are integral to the text; in many cases, pictures are the text.

The speaker will show what ehon do that makes them so attractive and accessible to people who do not read or speak Japanese, and how readers "read" books without text. He will share his conviction that ehon have abiding value and relevance today, that they provide useful new perspectives, and hold an important place on the broad stage of world art.

The speaker will illustrate his talk with examples of ehon from the large, recent exhibition at the New York Public Library.

日本の絵本—普遍的な魅力、特質と世界美術におけるその位置づけについて

ブラウン大学 ロジャー・キーズ

日本の「絵本」は、アニミズムから仏教、儒学などさまざまなルーツを持った、共同作業による独自の魅力に満ちた書籍芸術の一種である。多くの場合、図像（挿絵）そのものが本文であり、「テキスト」と言える。

講演では、日本語を話したり読んだりすることが全くできない人でも、日本の絵本に接近し、入り込み、魅了されることがなぜできるのか、そのわけを具体的に示してみようと考えている。文字テキストを持ち合わせない書籍を、読者はどのようにして「読む」のか。絵本は、今日においてなお価値と関連性を保ち続けていると講師は信じる。我々を新たな展望へと導き、世界美術という大きな舞台の上においても、重要な位置を占めているのではないだろうか。

講演中、最近ニューヨーク市立図書館で開かれた大規模な絵本展覧会の出品作品から多数の参考図を紹介する予定である。

第二部

絵入り本ワークショップⅢ

6月29日(日)

研究発表 (10:30～12:15)

月岡雪鼎と絵本—西川祐信からの継承と離脱—

山本ゆかり [国際浮世絵学会]

江嶋其磧作・西川祐信画

『女中風俗玉鏡』の初版と覆刻版をめぐって

倉員正江 [日本大学]

白楽天来日の伝説とその変容

—鈴木春信の『見立白楽天』を中心に—

張小鋼 [金城学院大学]

パネルディスカッション (13:45～17:00)

絵本・画譜 そのメカニズムを読み解く

コーディネーター 鈴木淳 [国文学研究資料館]

パネリスト 浅野秀剛 [大和文華館]

岩切友里子 [国際浮世絵学会]

佐藤悟 [実践女子大学]

クリストフ・マルケ

[フランス国立東洋言語文化研究学院]

閉会の挨拶 (14:00～14:10)

伊井春樹 [国文学研究資料館]

【研究発表】

月岡雪鼎と絵本—西川祐信からの継承と離脱—

国際浮世絵学会 山本ゆかり

江戸時代中期の上方風俗画は、京都の西川祐信（1671—1750）、次いで大坂の月岡雪鼎（1726—86）が中心となって、版本と肉筆画の分野で発展を遂げた。発表では十八世紀後半期に活躍した雪鼎の、特に絵本の考察に視点を置いて、祐信の模倣とその引力圏から離脱してゆく様子を辿ってみたい。

雪鼎は絵師の仕事の第一歩を版本の画工から踏み出した。現在確認できる最も遡る版本の例は、宝暦三年（1753）正月に大坂の版元・吉文字屋市兵衛から刊行された『絵本龍田山』である。明和二年（1765）に法橋となり、肉筆画を作画の基盤とするようになるまで、宝暦期（1751—64）の雪鼎は版本制作に専ら筆を揮った。

画壇登場にあたって、まず雪鼎に要請されたのは、寛延三年（1750）に没した祐信の後継者としての役割であった。絵本や往来物のなかで、雪鼎は祐信の美人画を模倣し、祐信風の絵を求める版元や需要者の期待に応えた。宝暦三年に刊行された画業最初期の二冊の絵本（『絵本龍田山』『遊女五十人一首』）は、和歌の注釈に祐信風の絵を附すものであった。特にその傾向は、版元・吉文字屋市兵衛から刊行された絵本や往来物により強くあらわれる。吉文字屋は大坂出版界を担った大きな書肆で、経営者である市兵衛は、号を鳥飼酔雅と名乗る作者でもあった。雪鼎は吉文字屋から多くの版本を刊行したが、酔雅をはじめとする作者と組み、テキストに応じて版元の要請する画風で挿絵を描くことが求められていたようである。

しかし一方で吉文字屋以外の版元から刊行するとき、祐信の模倣から離れて、雪鼎独自のスタイルによって、いきいきとした画面が展開する例が見られる。宝暦七年（1757）に大坂の版元・大野木市兵衛から刊行された『女武勇粧競』では、雪鼎は構想も自ら手掛け、武勇や操に長けた賢婦をのびやかに描いている。この絵本で描かれる女主人公達の姿には、祐信風を目指そうとする意図は見受けられない。挿絵としてテキストに従属するのではなく、むしろ雪鼎スタイルの絵そのものが、内容をリードするのである。『女武勇粧競』は多くの改題本が出版されていることから、この新しい人物画が人々に高く評価され、受け入れられたものと考えられる。大野木市兵衛は明和八年（1771）に雪鼎の漢画系画譜『金玉画府』を刊行した版元でもあり、雪鼎を単なる画工と見做して挿絵を依頼するのではなく、ひとりの絵師として尊重し、雪鼎の名で本を売り出してゆこうとする姿勢が認められる。また宝暦九年に大坂の版元・西澤九右衛門（藤屋彌兵衛版もあり、開版願は宝暦七年九月、大坂の正本屋九左衛門より出される）から刊行された『絵本高名二葉艸』においても、躍動感溢れる武者絵が展開され、画中の女性像には雪鼎様式の美人画の萌芽が認められる。

雪鼎は自立した画境を、まず武勇を描いた武者絵本系統のなかに見出したといえそうである。そしてこの分野に描かれる女性像に、祐信風を脱却した雪鼎様式の美人画の徴候が認められるのである。もともと和歌絵本や往来物といった分野は、祐信が得意とした領域であった。それだけに祐信的な表現に対する要望が版元、需要者双方に強くあったとも考えられる。

祐信から雪鼎へ、京都から大坂へ、十八世紀前半から後半へ、上方における絵本がどのように展開したのか、その一様相を雪鼎の絵本のなかにつけてみたい。

【研究発表】

江嶋其磧作・西川祐信画『女中風俗玉鏡』の初版と覆刻版をめぐって

日本大学 倉員 正江

『女中風俗玉鏡』（享保十七年〈1732〉正月刊 上下二巻二冊）は『絵本答話鑑』（同十四年刊）『絵本諭艸』（同十六年刊）と並び、浮世草子作者江嶋其磧と絵師西川祐信が組んで制作した絵本三作のうちの一つである。『割印帳』によればいずれも板元は京都の菊屋喜兵衛、売出しは江戸の小川彦九郎である。このうち『玉鏡』については早稲田大学図書館蔵本が初版初印、上下巻をそれぞれ二分冊した天明二年〈1782〉刊行の改竄本が二種存することが松平進著『師宣祐信絵本書誌』に指摘されている。本発表では其磧による『玉鏡』本文の典拠と特徴、享保十七年版が再印された事情、天明二年版（覆刻版）の改竄箇所等について若干の私見を加える。

享保七年十一月の「出版条目」発布により好色本は禁止され、翌年正月刊行の祐信絵本『百人女郎品定』は自主規制にせよ絶版を余儀なくされた。祐信画の魅力を経済的に生かし得る商品の企画が望まれるところで、菊屋がその先鞭を付けたと言えよう。享保十四年以降祐信絵本を積極的に刊行し始める。当初すでに浮世草子出版で菊屋とも提携関係にあった其磧の起用も読者の注目を集めるに奏効したであろう。祐信絵本は八文字屋本と並んで京都の「春慰み」として定着した。祐信絵本が江戸浮世絵界に多大な影響を与えたことは周知の事実である。

享保十五年正月菊屋刊行の其磧作浮世草子『世間手代気質』巻末に「とうわか、み後編／世諺／教訓 絵本諭艸」三冊・「御伽教訓／女中躰方 女風俗玉鑑」二冊が「近日出来」の旨予告されている。上巻内題下に「女中一代絵鑑／風俗躰方品定」とあり、『百人女郎品定』の絶版を意識して、主に町人層の「女中」を対象とした身嗜み指南書である。

上巻本文には苗村丈伯『女重宝記』（元禄五年刊）の剽窃が目立つ。同書一の三「女品定」（『百人女郎品定』にも示唆を与えたであろう）同六「女化粧の巻」の影響が顕著である。其磧が参照したのも当然というべき先行書であるが、『女重宝記』は序に『徒然草』を引用して女のひがみを「揉めなおす」と執筆目的を明記している。それに対し『玉鏡』に序はないが、町方の女性が傾城遊女の派手な風俗を真似ることを戒めながらも女性の本性に対する否定的描写は見られない。また其磧作『世間娘気質』（享保二年刊 絵師推定祐信）との重複表現が少なくない。下巻冒頭女子衣服の様式規定は『西鶴俗つれづれ』四の二の剽窃であるが、総じて重宝記の実用的記述、浮世草子の好色風俗描写を削除して、上層町人女性という読者対象を闡明にし、其磧らしい温雅な文章で綴られている。

初版の刊記はそのまま、「至公訓」の公告を「絵本玉葛」に差し替えた再印本（上下巻合一冊）がある。これは『至公訓』（享保十七年正月刊）が同年四月に絶版処分となったことを受けた処置であろう。国立国会図書館本巻末付載「絵本類書目 菊秀軒」には三十作の絵本名を挙げるが、そのうち最も下る印本は寛延三年（1750）正月刊『絵本忍ぶ草』である。これは祐信が八十歳で没した年に当たり、この時期まで流通していたことを示す。

天明二年版はともに菊屋喜兵衛刊行の覆刻版であるが、下巻を二分冊した『女中風俗艶鏡』は無署名の序を付し、末尾に「是こそ春のめでたき贅物鄙の童のはつ土産ならんかし」と明記している。初版の読者対象よりはさらに低年齢層を狙った絵草子として復活している。長くその商品価値を保ったことが改めて窺えよう。

【研究発表】

白楽天来日の伝説とその変容—鈴木春信の『見立白楽天』を中心に—

金城学院大学 張 小鋼

白楽天（772～846）は日本文学に最も大きな影響を与えた詩人の一人である。彼の詩文はその存命中に、すでに日本に伝われ、人々に親しまれてきた。また、大江朝綱（886～957）や高階積善（？～1014）が白楽天を夢に見たような逸話からも、当時の日本人が如何に白楽天に夢中になっていたかをうかがうことができる。『太平廣記』（宋・李昉等撰）にも、日本人が白楽天の来日を待望していた伝説を記している。

しかしながら、日本において白楽天を受容する過程では、必ずしも白楽天に対し歓迎一辺倒の心情ではなかった。十五世紀頃創作された謡曲『白楽天』には、唐の太子賓客白楽天が玄宗皇帝の「日本の知恵を計れ」との宣旨を受け、筑紫の海で住吉明神の化身である漁翁と出会い、詩歌の応酬を行った。その後、漁翁が正体を現し、「立ちかへり給へ楽天」と歌いながら、神風を巻き起こし白楽天が乗っている船を中国に吹き戻したというストーリーである。謡曲『白楽天』では、白楽天⇔住吉明神、唐詩⇔和歌という図式で対立させ、最後に神風によって白楽天の船を中国に吹き戻した場面は、まさに当時の日本人の心情を象徴的に表したのである。

江戸時代に、謡曲は画題よく画題として浮世絵に取り入れられていた。『白楽天』も例外ではなかった。たとえば、鈴木春信（1725?～1770）の「見立白楽天」、葛飾北斎（1760～1849）の『詩歌写真鏡 伯楽天』及び歌川国芳（1779～1861）の『風流人形尽 住吉大明神 祐天』はそれである。北斎と国芳の作品は基本的には謡曲『白楽天』の趣向を踏まえたものであるが、春信の作品は見立という手法によって趣向を変えた。

春信の『見立白楽天』（中判、27.9cm×26.7cm）は明和年間（1764～1772）に制作したものとされ、画題はまた『お仙と蘭』などがあり、いずれも後の研究者によって名づけられたものである。絵には朝鮮通信使を白楽天に、茶屋の芸者お仙を住吉明神になぞらえ、二人は互いに文人画の四君子の蘭と浮世絵の美人画を見せ合う場面が描かれている、というのは一般的な解釈である。

朝鮮通信使とお仙という奇抜な発想は何となく春信らしいところを感じられるが、もしかしたら、白楽天の『琵琶行』の影響も存在していたかもしれない。『琵琶行』は白楽天が江州に左遷された間、友人を湓浦の波止場で見送った時、隣の船から琵琶の音が聞こえてきた。その演奏の腕を見るには京の都の人でないとなかなかできないに違いない。問い合わせたところ、やはり長安の芸者で、琵琶の名手であった。今や彼女は年を取り、茶商人に嫁ぎ、江州に住むこととなった。数ヵ月前から、夫が行商に出かけたまま、まだ戻ってきていない。そこで白楽天は彼女を船に招き、琵琶を弾いてもらい、『琵琶行』という叙事詩を作ったわけである。『琵琶行』より一年前に、白楽天には『夜聞歌者』という詩があり、鸚鵡洲において隣の船から若い女性の歌を聞いた内容であった。この二つの詩作のため、後の人々は白楽天と芸者裴興奴（『樂府雜錄』卷上琵琶によると、貞元年間の琵琶名手という）との恋愛物語まで敷衍されたのである。元の馬致遠の『江州司馬青衫淚』、明の顧大典の『青衫記』、清の蔣士詮の『四弦秋』などがその類の作品である。

『琵琶行』は浮世絵に与えた影響も十分考えられる。宝暦三年（1753）に大岡春卜の『丹青錦囊』（序文は寛延二、1749）という絵手本集が刊行された。その巻三には「白居易琵琶行図」がある。この絵には、潯陽江辺に白楽天が友人と別れの場面が描かれている。注目すべきことは、画面の右側に白楽天の友人とされる人物が船に立っている部分は朝鮮通信使が船に立っている部分と非常に似通っている。したがって春信の『見立白楽天』が構図において「白居易琵琶行図」から大きな示唆を受けていたと考えられる。また、朝鮮通信使とお仙が船での邂逅はやはり白楽天と琵琶芸者とのことを想起せざるにいられない。

【パネルディスカッション】

絵本・画譜 そのメカニズムを読み解く

(コーディネーター) 鈴木 淳

〈イメージとテキスト〉

○なぜ本なのか

そもそも絵本という語は、絵の書冊の意味より、絵の手本の意味が本来といわれる。しかし、絵本が手本であるということと、書冊であるということは、絵本を内容と形態からいい当てた表裏の問題のように思われる。ここではまず、絵本の書冊という形態に注目したい。絵本と一枚摺りは、印刷物としては、早くから平行して行われてきた。一枚摺りには、一連のテーマによるシリーズ物もあり、中身は絵本と変わらない場合がある。異なるのは、一枚摺りは、壁等の面に貼ったりして鑑賞するのに適しているが、紛失しやすく、携帯や保存には適していないことである。絵本は、その逆で、保存にはよいが、掲示するには不便である。もう一つの相違は、経費の問題で、書冊にするためには、彫り、摺り以外に折、丁合、綴じ、表紙掛けなどの手間と経費がかかった。

また、書冊の種類には、袋綴りの冊子と、数は比較的少ないが、一枚摺りを貼り合わせた帖装（画帖装）との二種類があり、冊子の絵本は寛文年間（1660年代）から雛形本や菱川師宣のものが行われ、帖装の絵本は、大森善清の絵本で元禄年間（1690年代）のものが最初とされる。帖装は、冊子に比べると、同じ版木で摺った絵を見開きで見ることができるうえに、糸綴りの手間が省ける分だけ経済的であったし、一枚摺りと両方に使い回しができるという利点があった。さらに、色摺りの技術が確立してからは、見開きで鑑賞できるという利点が増幅され、むしろ冊子より贅沢なものも制作されるようになった。ただし、冊子に比べて破損しやすいという欠点は変わらない。

書冊とくに冊子が、保存に便利であるということは、それだけ長い時間に亘って鑑賞され、利用されることが可能であったことを意味する。そのため、ある程度、時間を超えて関心を集める対象を扱い、長期に亘る販売が見込まれる場合は、多少、コストをかけても冊子にした方が合理的であった。逆に、風俗、演劇などで、その時限りの即時的な対象を扱ったものなどは、わざわざ冊子にする必要性は薄かった。

○絵本の種類と利用

実際の絵本に当たってみて特徴的なのは、版や摺りを重ねることが多かった以外に、欠本、端本、落丁、切り取り等に加え、いたずら書きや手擦れなど、利用された形跡が顕著に認められることである。それらは、単によく読まれたという他に、もう少し踏み込んだ使われ方をされた形跡と考えるのが穏当であろう。そして、こうした利用度の高さこそ、一枚摺りではなく書冊の形態を取らせた原因とみることができる。

絵の手本を本来の意味として持つ絵本であるが、ふつう絵本の種類は、鑑賞用と教則用に分けて考えられている。鑑賞用は、教養的なものと、娯楽的なものからなり、教則用は、絵手本などと呼ばれ、初心者が絵の描き方の教科書として使うもので、画題ごとに整理されていることが多い。絵手本には、師宣絵本で「絵尽くし」の書名を持つものや、橘守国をはじめとする大坂の通俗狩野派による絵本、さらには鋳形蕙斎の略画式や葛飾北斎の漫

画などがあり、江戸時代の前期から末期まで広い範囲で行われ、長きに亘って売れ続けた。

この他、絵手本との区別が微妙であるが、明らかにデザインブックというべきものが存在し、小袖雛形本をはじめとする雛形本（図案集）が、服飾、彫り物、細工物などのデザインの利用に広く供されていた。これらのデザインブックの利用者は、一般の人々ではなく、基本的にプロの職人であった。初心者とプロということからいえば、絵手本とデザインブックは、対極に位置するもののようにみえる。しかし、両者とも、絵の手本集という、同じ本質によって捉えられるのではないか。さらにいえば、鑑賞用と考えられる絵本の中にも、実は手本として利用されたというものが少なからず認められる。

○画題と詞書き

次に、絵本の画題についてみると、ほとんどの絵本は、一枚の絵ごと、あるいは全体として、一定の画題を持っている。画題は、素材としてみると、和歌、物語、故事などの古典的でより雅正な画題と、風俗、演劇、武者、童話、諺などのように、より通俗的な画題とに分けることができる。同時に、この画題の雅俗による区別性ととも重要なのは、西川祐信の『絵本倭比事』が強調するように、和漢による区別性である。狭義の絵本は、和の画題を扱うことが多く、画譜は山水、花鳥、人物、中国故事などの漢の画題を扱うものが多いということもできる。

しかし、画題には、単に素材性としての意味だけでなく、文学、芸能などという本意という同じような意味合いがある。本意とは、本来あるべき意味ということであるが、絵の本意を伝えるためには、描かれる情景や道具立てが、たとえさまざまなバリエーションがあるにせよ、基本的には共通していなければならなかった。それは、和歌において題意を表現する際の約束事と同じようなところがある。よって、作画において、オリジナリティがあるかないかという観点も、むしろ本意に忠実か否かという観点に置き換えた方がよいかも知れない。また、絵本が手本集として利用されるのも、絵において、本意が出来る限り尊重されなければならなかったことと深い関わりがある。

画題と密接な関係にあるのが詞書きである。その中には、人物、名所、花鳥などのような画題を簡単に断ったものもあれば、狂歌絵本や絵俳書などの詩歌、俳諧もあれば、さらには絵解きのように絵全体を説明した、相当長い文章もある。文章の制作は、絵師以外の作者が担当することも多いが、鳥居清長の『絵本物見岡』や歌川豊国の『絵本時世粧』のように、絵師が兼ねている、もしくは兼ねていることを装うものもある。というのも、少々長い詞書きも、基本的には絵本の中であり、画工が絵、文とも著作するものという意識が強かったからではないか。

詞書きがなく、絵だけの絵本というものもないわけではないが、ふつうは何らかの形で詞書きを有している。また、詞書きが少ない場合でも、それは省かれただけで、いわば隠された詞書きが厳として存在するというのもできる。絵本においては、絵（イメージ）と詞書き（テキスト）とは一体のものとして存在しているようなところがある。そして、それらの詞書きや画題を分析して行くと、背後に横たわるものとして、和漢の故事、詩歌、物語などの古典はもちろん、絵本と隣接する古浄瑠璃、歌謡、御伽草子などの芸能、文学における本意に行き着くことが少なくない。

【パネルディスカッション】

近世絵本の誕生をめぐって

(パネラー) 大和文華館 浅野秀剛

近世になって、「絵本」という語に、中世以前の写本による絵手本・粉本という意味に加え、絵が主体の版本の概念が生じ、次第にその概念が「絵本」の主たる意味になったことは広く知られている。しかし、絵が主体の版本という意味の近世絵本がどのように誕生したかについては、研究が十分に進んでいるとはいえないのが現状であろう。この短い発表でそのことを取り上げることはできないが、近世絵本（以下、単に「絵本」という）の初期のものにどのようなものがあり、「絵本」という用語が近世絵本を意味する言葉として定着するのはいつ頃のことかということ、検討することの意義は小さくないと思う。

大きな流れとして、近世の絵入版本がおびただしく制作刊行される中で、次第に、絵のみ、あるいは絵中心の版本が誕生し、それを意味する言葉として「絵本」が当てられ、定着するというを確認したい。

管見の範囲で、刊年の明記された絵本で最も早い作品は、「万治三年（1660）八月吉日 江戸新版」の刊記を有する『よしはらまくらゑ』である。この本は、序文を除けば文字部分のない完全な絵本である。旧渋井清本しか確認されていないので、文字部分がなかったと断定するのは難しいが、旧渋井清本は、一応、完本と目される本である。内容は吉原遊女絵本であり、枕絵本の性格をも有している。それに続くのは、「寛文九己酉年（1669）初冬吉日 山本九兵衛板」の刊記を有する『枕屏風』（2冊）である。『よしはらまくらゑ』よりも早い枕絵本に「明暦元年（1655）七月下旬 開板」の刊記を持つ『修身 演義 人間楽事 楽事秘伝抄』があるというが、実見していず、確かな紹介にも接していないのでそれについては保留したい。以上のような有年記作以外に、同時期あるいはより早いと考えられる作品に、『黄素妙論』、『四十八通ゑすの事』、『枕絵断簡』（卷子本）などがある。

枕絵本の外に目を転ずると、師宣署名入りの有年記絵本の最初作として名高い『武家百人一首』（寛文12年）がある。より絵本らしい絵本ということになると、『吉原恋の道引』『古今役者物かたり』（ともに延宝6年）、そして延宝8年刊の師宣の絵本群ということになるであろう。遅くとも、延宝5年には、子ども向けの小型絵本が刊行されているので、延宝期には大人向け、子ども向けともに、近世絵本というジャンルが確立すると考えてよいであろう。

しかし、「絵本」という言葉が、近世絵本を指す用語として一般化するのには、もう少し時間を要したと思われる。「絵本」に先行し、それに近い意味で用いられたと思われる言葉に「絵尽し（画尽し）」がある。「絵尽し」あるいは「一尽し」は、近世を通じて使われているが、まもなく、「絵本」という言葉が近世絵本をほぼ包括する言葉として使われ、定着した。管見を厭わず述べれば、その早い例として、延宝8年の師宣の絵本に「絵本」の表記が認められる。「絵本」という言葉は、かなりの速さで普及し、元禄年間には、江戸、上方共に、近世絵本を指す用語として広く認識され、用いられていったようである。

【パネルディスカッション】

元禄末から宝暦期の上方の絵本の諸相

(パネラー) 国際浮世絵学会 岩切友里子

江戸では、延宝期頃から、菱川師宣による多くの絵本が出版され、絵本文化の端緒を開いたが、師宣没後には江戸での絵本類の出版は減少している。一方、上方での絵本類の出版は、江戸の出版と交替したかのように元禄末から宝暦年間にかけて非常に盛んに行なわれ、浮世絵系の絵本ばかりでなく、狩野派系の図彙、画譜なども多く出版された。明和期を境とし、寛政以降になると、絵本の出版は拠点を再び江戸に移したかの如き状況を呈するが、宝暦以前の上巻絵本のあり方は、以後の絵本の展開の基礎となったものと思われる。この期の絵本は、享保14年(1729)版の『新撰書籍目録』の「絵本類」、宝暦4年(1754)版の『新增書籍目録』において「絵本」と分類されている本から概観することができよう。一覧すると、挙げられている本の内容、性格は大まかには、以下のように分けられる。

1. 画題図典・図彙
2. 古画の名筆集／画譜
3. 武者絵本
4. 諸職のための素材意匠集
5. 和歌、古典文学を題材とするもの(当世風俗化したものが多い)
6. 故実、教訓
7. 当世風俗(美人・こども)

1～4は、絵手本と呼べるものであり、一般に絵を志す初心、画工の便りのためにと序されるものが多いほか、4の類の後印本に付される同類の絵本目録などには、ふくさ絵、ふすま絵、押絵、屏風、掛物、染物模様方、絵馬・幟・(武者絵)といった用途が示されている。1の類は、橘守国の『絵本故事談』(正徳4年・1714)、『絵本写宝袋』(享保5年・1720)、『絵本鶯宿梅』(元文5年・1740)、『絵本直指宝』(延享2年・1745)などに代表されるもので、3の武者絵本とともに、画題図像の定立と普及に力を持ち、その後の絵師達によって図像の伝統的継承及び、画題図像をコードとした当世風俗への翻案が行なわれて、以後の浮世絵の作画に大きな影響を与えている。5～7は、西川祐信の絵本類が多くを占め、春信の錦絵に転用されている例が多く指摘されている。この現象は、絵本の錦絵化とも見られ、1、3類の絵本の図も含め、画題典拠としてではなく、絵師が画囊として利用している面もある。6の場合は、テキストの絵解きとして絵が使われているが、この内でもしばしば、画題図像が用いられており、図像の持つ意味が共有知識として広く認識されていたさまが窺われる。また、一枚絵ばかりでなく、明和以降、江戸で多く出版された武者絵本は、その多くを宝暦以前に上方で出版されたものを基としており、石川豊信、北尾重政の風俗絵本などにも上方絵本の影響が窺える。絵本の享受の仕方はさまざまで、江村北海『授業編』(天明3年)の「幼学」や、津田正生『眼前教近道』(文政11年)が、橘守国や西川祐信の絵本を推奨しているように、画作や画道とは関係なく、子どもの教育のためにも絵本は格好の教材であったようである。絵本の作り手側にはそれぞれの目的があり、絵師によって画相も異なるが、いずれの場合も、享受する側にとっては、絵本は、自由に選択し、利用し、楽しむことのできる、ありとあらゆる絵の集積として、大きな魅力を持つものであったといえよう。

【パネルディスカッション】

奥村政信のアルバムと見立絵本について

(パネラー) 実践女子大学 佐藤 悟

菱川師宣、杉村治兵衛、奥村政信の絵本を検討することにより、画題と見立てについての考察を行ってみたい。

菱川師宣は多くの絵本を制作しているが、その特色は古典的な題材の摂取を行った絵本と、風俗を描いた風流絵本ともいうべき絵本類の制作にある。前者には古典の当世化の意識は見られるものの、見立ての意識は乏しいように思われる。後者についても見立てを見いだすのは困難であろう。

天和四年(1684)に刊行された杉村治兵衛画『大和風流絵鑑』について、浅野秀剛は『浮世絵大観 大英博物館Ⅲ』の同書解題において、「力点はやはり、当時財力を蓄え文化を担いはじめた上層町人の風流に置き、時には何か故事や物語を想像させるような図様を混じえて多彩な画面が展開されている。」と指摘し、一図については「見立謡曲紅葉狩り」というタイトルを付している。このほかにも「十二段草子」や「李白観瀑」などの見立てと思われる図様もあり、見立絵の成立にこのような風流絵本の果たした役割は大きなものがある。

奥村政信には宝永～享保前期に出板されたと思われる折り本様式のアルバムがあり、洪井清「政信之墨絵」(『浮世絵之研究』二十三号、日本浮世絵協会、1929年)などに紹介されている。一方宝暦二年(1752)刊『鶴の嘴』、『媛女鳥』、『江戸絵簾屏風』など宝暦ごろに刊行されたとおぼしき絵本がある。アルバムと絵本には共通した題材が多く見られ、それらを提示することによって、画題の成立に果たした奥村政信絵本の役割が明らかになるであろう。

【パネルディスカッション】

ヨーロッパのコレクションから絵本・画譜の用途を考える

(パネラー) フランス国立東洋言語文化研究学院

クリストフ・マルケ

江戸後期から多くの絵本・画譜が日本からヨーロッパへ「流出」したことはよく知られていることである。実際、ほとんどの場合は日本に滞在したヨーロッパ人が目的を持って積極的に蒐集したものである。本発表では、ヨーロッパとりわけフランスのコレクションを例に絵本・画譜の蒐集、受容、そして、海外におけるその役割を考察してみたい。つまり、ヨーロッパ人の眼に日本の絵本・画譜がどのように映ったのかを考えることによって、国内とは別の見方・用途があったことが窺える。ヨーロッパの図書館・美術館の絵本コレクションの整理の仕方や、その目録などからそれについて多くの情報を得ることが出来る。絵本・画譜に対する関心がピークを迎えた十九世紀後半には、絵本は大きくわけて、日本の物質文化・風俗を知るための資料、肉筆にかわって日本の視覚芸術を理解するための画集、またジャポニズムの影響下での芸術家のインスピレーションの源流として存在したことが挙げられる。

MEMO

発行 2008年6月24日

編集・発行者

実践女子大学文芸資料研究所

横井 孝

〒191-8510 東京都日野市大坂上4-1-1

電話／FAX 042-585-8880

Email bungei@jissen.ac.jp

印刷所 三美印刷

